

表現の基礎

水谷修編

表現の基礎
講座 日本語の表現 1

1985年5月15日

初版第1刷発行

編 者 水 谷 修

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京 (291) 7651 (営業)

東京 (294) 6711 (編集)

振替口座 東京 6-4123 番

落丁・乱丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料は小社負担にてお取替いたします。

©水谷 修 Printed in Japan

印刷／厚徳社 製本／矢嶋製本

0381-15401-4604

表現の基礎
目次

I ことばが伝えるもの

ことばが伝えるもの

水谷 修

一 われわれにとつてことばとは 何のためにことばを使うか 変わりゆくことばの姿 言語観のちがい 二 ことばの実態をとらえるために ことばで表わすこと ことばで表わすもの 三 ことばの適切な使用を求めて 適切な使用を支える条件 四 豊かで正確な表現を可能にする 日本語をつくりだすために

II 言語表現とは何か

言語表現とは何か

宮地 裕

一 ことばと心 言語は記号か 谷崎潤一郎『文章読本』の言語論 鈴木 木良の「てにをは」論 時枝誠記の「辞」の論 「ことばは心の声」 ことばと思考・心情 言語表現の独立性 ことばは心をきたえる 二 言語

表現の性格 日常的言語表現の価値 表現結果としての言語表現 表現
 することとしての言語表現 言語について 言語・言語活動・言語生活
 三 言語理解の構造 表現は理解を待つ 理解の構造 時枝誠記の説
 語の理解と文の理解 対話における理解過程 W・L・チェイフの説
 四 言語表現の論理と情感 文脈 普遍的論理 日常言語の論理学
 日本の文章論 文章談話の文法的研究 言語表現の真意 言語表現の情感
 詩の言語

III 何をことばで表現するか

ことばで事実をつたえる

木下 是雄

57

一 はじめに 二 事実と意見 三 事実と意見の書きわけ 四
 事実の記述の要領 五 内容を選びぬけ 六 記述の順序を考えよ
 七 主観を混入させるな 八 明快・簡潔に書け まぎれのない文
 明確な用語法 はっきり言い切る姿勢 簡潔 九 記述文の例

論理をことばで表現する

沢田 允茂

80

ことばを表現することば

竹内 敏晴

100

一 情報伝達と表現 二 からだが語ることば 三 謎の作り方
 四 歌にあらわれたことばの自分 五 「舌足らず」から「他者への架

け橋」まで

IV 誤解はなぜ起こるか

誤解はなぜ起きるか—音声による表現と理解— 大坪 一夫

- 一「ことばがわかる」とは 二話したことばと書きことば 三話
しことばの理解と知識 四 拍の持続時間と話したことばの理解
五 場面と話しことばの理解 六 話しことばの理解と話をする目的
七 おわりに

121

表情・動作による表現と理解

田 中 望

- 1 はじめに 2 誤解の生じる場 外国人と日本人のコミュニケーション
ヨシから 日本人間のコミュニケーションの場への示唆 3 外国人に奇
異に見える日本人のしぐさ 輪 つの出し 手首折り コミュニ
ケーション上の危険性 4 誤解をふせぐ道 5 おわりに

137

V 社会と言語表現

表現撰択の心理学

入谷 敏男

161

- 一 序論 意図と言語表現とのかかわりについて 言語情報のレパートリー
- 二 表現撰択の規準 ある表現を口にするとき、どのような意識が働くか
話しかけ表現と応答表現の対応
- 三 現代語表現の直観的分析―筒井康隆氏の言語感覚論について―
- 四 会話にみられる音声表出の変化について
- 五 むすび―再び表現の撰択作用について―

生活の変化とことばの変化

柴田 武

196

―新表現が定着するまで―

- 一 いくつかの言い方がある
- 二 電気機器の操作を表わす語
- 三 概念と語の関係
- 四 生活の変化とことばの変化

筆者略歴

221

装幀 向井周太郎 協力 西野博昭

表現の基礎

講座 日本語の表現 1

●全集
水谷修
中村明
野村雅昭

■とびらエッセイ

表現について

林 大

表現ということばは、まことに大きなことばである。だから少しおおげさなところから始めたいと思う。元来言語というものは、人間が最も発達させ、人間文化の最も深い基盤をなす、記号活動の一つである。記号というものを、約束という範囲で考えるならば、表現は、記号活動よりもずっと広いところにあつて、記号活動の大きな部分を占める。人間活動の中の表現は、理解を相手とし、理解と組になるもので、意図的な行動といふべきであろうと思う。釈尊と迦葉とのあいだの拈華ねんげと微笑みじょうとは、表現の極みにちがいないが、それが記号かどうかは、いま、論の及ぶところでない。ここでは、やはり言語の表現にかかずらわることになりそうである。

さて、言語というものを、客観的に見ようとすれば、次のような三段階があるろうと思う。段階というのは少しおかしいかもしれないが。

第一は、言語という活動そのものであつて、これには、その活動の枠である言語要素と、その実生活における運用、すなわち言語行動とがある。

言語行動には、媒体を通しての活動もあり、人間の外の組織による言語処理も含めよう。表現を言語の領域で捉えたとすれば、その位置はもちろんこの言語行動である。

第二は、広くいえば言語行動の中に含められるかもしれないが、言語に対する人間の自覚、我々の言語行動はこのようなものでよいか、言語を維持し、発達させるにはどうしたらよいかを、人間が考えることである。言語に標準を設けようとするのもその事業の一つである。これらを端的に何と呼んでよいかわからないが、仮に言語自覚と言っておこう。表現もまた、その反省の焦点である。

第三は、人間の一人一人が言語の能力を習得し、自分の社会適応を望ましいものとするとともに、思考、思想の力を発揮するように努めることである。これは、言語学習と言っておこう。学習の重要な部分が表現にあることは言うまでもない。

私は今、言語標準の問題にこだわっている最中なので、標準と表現との関係にふれてみたくなる。表現ということばの一つの意味からすれば、標準から離れることが表現として価値のあることになるかもしれないと思う。もっとも言語そのものが、改めて約束しないでも社会の中に、一つの人間集団の中に、一種の標準を自然に成立させているということができる。だ

から、言語することがすなわち表現だとすれば、表現と標準とは抵触しないわけではある。言語活動を表現と理解にわけらば、まず標準的の表現が考えられることにもなる。

しかし、表現といって打ち出されてみると、それは極めて創造に関わるもののようで、そうすると標準から離れることになるのである。すなわち表現には、標準から離れられない面と、標準から離れたがる面があるのだと言ってもよからうかと思う。破格ということが論ぜられる。おのずからなる標準離れもあれば、標準をわざと離れてみせる文芸的效果もあるわけであろう。まず、標準離れだけが表現だと言うわけには全くないが。

もう一つ付け加えておこうか。表現という活動には、第一次のものと、第二次のものがあることである。言語活動を原理的に、話す、聞く、書く、読むの四つに分けるのが常であるが、現実の言語行動に当てはめて考えるとすれば、第二次の、やる（演）とでも言うべき、第五の領域を立てたいのである。理解するがままの表現、音楽でいえば、まさに演奏である。演劇についていうと、原作が第一次で、脚本が第二次、脚本が第一次ならば、演出が第二次であろう。言語行動に即していえば、朗読があり、通訳があり、翻訳がある。書道でいえば、臨もあるが、古人の歌や詩や、聖典の一句一偈を書くのも第二次の行動である。この類の中には、その創造性

においても、その伝真性においても、目的や効果についても、いろいろ多彩なものがある。ここで言いたいのは、言語的第一次活動の能力を準備するために、ただ創作をのみ要求するのではなくて、これらの第二次的な作業を利用することを、教育的に考えなおすことである。これは、昔の教育の方法だったのである。

朗読や臨書といえは、原作の意味に深く酔って、自分でいい気持ちになつてゐる表現もあるだろう。そうは言つても本来表現は、相手あつてのことである。相手の受け取りかたが、いつでも問題になつていなければならぬまい。放送記者やアナウンサーの抑揚が、その聞き取り方の標準性に関して近ごろ氣になつてたまらないのであるが、しかし人のことは申すまい、この文章も、読み手のことははからずに、苦し紛れに書き付けた書きっぱなしなのである。御免なされたい。

I

ことばが伝えるもの

ことばが伝えるもの

水谷 修

一 われわれにとってことばとは

何のためにことばを使うか

ことばは、われわれの生活のあらゆる場で使われている。新聞や放送で、あるいは職場や日常生活のやりとりの中で、また、学校教育や研究活動の場でもことばなしの行動は考えることができない。

ことばを使うことによって、われわれは、未知の事実を自分のものにすることができるし、逆に、自分の持っている情報を他人に伝えることもできる。ほかの人の喜びや悲しみも受けとめることができるし、おのれの感情を表わし示すことも可能である。

しかし、あまりにも便利であり、身近なものでありすぎるために、われわれはことばの役割の重要さを忘れてしまうことがある。ことばの形式と事実的内容がどんなに強く結びついたもので